

収集車はなぜ走り続けるのか

横浜市立上飯田中学校 3 年 濱田 紗良

休日、遠くから微かに聞こえてくるゴミ収集車の音。機械の回転音に混じって、ゴミ袋が投げ入れられる重い音が家の中に響く。収集員が手際良く袋を持ち上げ、機械の中へと積み込む。その一連の動作には、何の迷いもない。誰かに注目されることも、称賛されることもなく、黙々と繰り返される作業。その姿に、どこか畏敬のような感情を覚えた。

実際、ゴミ排出量の増加に比例して処理にかかるコストは年々増えている。私の住む横浜市では、ゴミの収集・運搬・焼却などにかかる年間の予算が約四百億円にのぼる。東京二十三区では、実に一千億円超。これらはすべて、私たちが支払う税金でまかなわれている。税金は、見えないところで社会の基盤を支える不可欠なエネルギーなのだ。

この仕事が一日でも止まれば、街はすぐにゴミであふれ生活の秩序は崩れるだろう。日々の循環が乱れず滞りなく進むとき、その恩恵があまりに自然と日常に溶け込み、私たちはその裏側にある手間や仕組みを当たり前だと思いがちである。

そこで私は、自分にこう問いかけるようになった。

「自分の出したこの一袋のゴミに、どれだけの手間と税金がかかっているのか。」

例えば、一本のペットボトル。それが収集され処理されるまでに、多くの人の労働と見えない税の負担が積み重なっている。だからこそ「どうしたら捨てずに済むか」を考えることが、社会に貢献することにつながると思う。

使い捨てを減らす。必要なものを必要な分だけ買う。正確な分別を心がける。その小さな一歩が、結果として税の負担を軽くし、社会全体の効率を高める。税とは、ただ支払うものではない。自分の暮らしの延長線上にあるものだ。一人の百歩より、百人の一歩。私たちは、社会の持続性を共に担う当事者としての自覚をより高め、今を生きるべきではないだろうか。

将来、私が納税者となったときには、「いくら取られるか」ではなく、「どのように活かされているか」を基準に、様々な視点から社会に目を向けたい。そして、自分もその税によって構成される社会の一員として、自分の暮らし方が社会の負担とならないように、小さなことにも責任ある行動をしていく。税金によって守られてきた日常があるということを、私たちは忘れてはならない。

今日もまた、ゴミ収集車の音が家の中に響いている。その音は、税の力が社会を支えている証である。その支えが絶えない限り、私たちの暮らしは明日もまた整然と進んでいく。